

してこのとき、自我の宇宙的昂揚をえることができるのでしょうか。逆に荒涼たる暗黒の虚無こそ至りついた地点ではないでしょうか。

自己を神にするというのは最高の意味においての自己肯定であるべきものですが、ここでは最高の自己肯定が完全なる自己破壊に連続しているのです。これほど悪魔の快哉を叫ぶ結果はないでしょう。自我の尊嚴はどこに由来するか。やはり神の無限性からきてはいるといわざるを得ないでしょう。そのもつとも貴重なものを逆手にとつてそれを虚無と暗黒の荒野に引きずり込む、これほど悪魔にとって痛快なことはないのです。しかしあなたはそのような悪魔の詐術はとつくに承知のはずです。にもかくわらずなぜ自殺を自分の義務としたか。それはあなたの誠実さ、純潔さによるのでしょうか。あなたは現世的自我の有する我意の絶対

性をとことんまで非妥協的においつめることによって、その問題性をあぶりだしていったのです。結局そこにあらわれてきたのは悪靈によって破壊された精神の荒野に過ぎなかつたのです。これはあなたの、あなたなりに徹底した思念による、ニヒリズム的憑依への警告にはかならなかつたのです。

こうしてわたくしの手紙はその結論に達したようです。あなたの死は無神論が普遍化した時代への、無神論への、やはりキリスト的愛に満ちた殉教の一形式であったのだと。こう最後の言葉をししながら、わたくしのこの手紙の最初に記した、あなたこそもつとも心にしみるニヒリストであつたという言葉を改めて心のなかで囁みしめたいと思っています。

九州大学出版会刊		〒812-0053 福岡市東区箱崎7-1-146 九州大学構内	(表示価格は本体価格)
清水孝純	ドストエフスキイ・ノート	電話 092-641-0515 (直通)	ドストエフスキイ没後百年記念『罪と罰』の本格的な新しい解説の試み。 錯綜した世界の、さまざまな角度からする復元を通して、その深層の象徴構造を探る。問題への多面的アプローチによって、文学一般へのよき入門書もある。(昭和五十七年第一回池田健太郎賞受賞)
清水孝純	『罪と罰』の世界	四六判 四一六頁 四、五〇〇円	ヨーロッパ文学をその源流において捉えようとする試み。やがて後世に大きな影響を生み、豊かな枝葉を繁らせていった中世文学にスポットライトをあて、興味溢れる梗概と斬新な味説によって、無類の楽しい想像力の饗宴に誘う。
清水孝純	西洋文学への招待 中世の幻想と笑い	A5判 三八〇頁 二、七〇〇円	木下豊房といふことになる。これに対して特殊日本的に大きな影響を与えたものに江川卓の仕事があった。どの国においてもドストエフスキイはそれをロシア語で読む人が極めて少ないにもかかわらず、翻訳で読む人が多大であるという特徴がある。日本はフランスとともに読者数が多く、小林秀雄以来ドストエフスキイ論の一つや二つ持たないでは文芸評論家とはいえないといった空気が存在しており、ドスト論の数は多大であるがそのほとんどが原文を読まない著者によるものだった。これに文芸ジャーナリストや編集者を加えると、わが国には原文を読まず読めないドスト読者の広い層が存在するのである。

長瀬 隆

『カラマーゾフの兄弟』に続編は無かつた

第二次世界大戦後のドストエフスキイへのアプローチで国際的な規模で大きな影響をもつたのはバフチンの『ドストエフスキイの詩学』(原題)の出現であった。この学派のわが国における代表者は、発足以来その中心にあり、本年四十周年を迎えたドストイエフスキイ会の代表であり、『ドストエフスキイその対話的 세계』その他の著者である木下豊房といふことになる。これに対して特殊日本的に大きな影響を与えたものに江川卓の仕事があった。どの国においてもドストエフスキイはそれをロシア語で読む人が極めて少ないにもかかわらず、翻訳で読む人が多大であるという特徴がある。日本はフランスとともに読者数が多く、小林秀雄以来ドストエフスキイ論の一つや二つ持たないでは文芸評論家とはいえないといった空気が存在しており、ドスト論の数は多大であるがそのほとんどが原文を読まない

著者によるものだった。これに文芸ジャーナリストや編集者を加えると、わが国には原文を読まず読めないドスト読者の広い層が存在するのである。

だれにも気づかれ曠がれていたこの問題に触れて、「原文を読まないドスト論は必ず誤る」と明確に記した最初の人は寺田透だった。ドストエフスキイのフランス訳の欠陥を指摘したジイドの訳者なればこそ、また道元『正法眼藏』の解説において「仏典はサンスクリット語かパトiri語で読まねばならない」と記した人に相応しい癡言であった。江川の仕事もこれに鼓舞されてのものだったろう。ベードヌイエ・リュードのベードヌイエが「貧しい」と同時に「氣の毒な、可愛そうな」の意味を有し、従つて『貧しき人々』という文語訳は適切であるといった指摘には教えられた人は多かつたはずである。

しかし彼は調子に乗って大きな過ちを犯した。それはロヂオン・ロマーノヴィチ・ラスコリニコフの二語の冒頭のロシア文字P(エル)を三つ重ねるとPPPとなるのを、ヨハネ黙示録の666と読み、ブルノ・バウアードの研究に従って、皇帝ネロすなわちアンチ・キリスト(流血の彈圧者)であると断じたことである。これは江川の名を高からしめ新聞社の賞を得ることになった出来事であつたが、PPPは単なる偶然かもしれない、たんなる思いつき以上ではないのである。国際的にはまったく通用しない言説であつた。ラスコリニコフはけしてアンチ・キリストではない。ポルフィリードとの会話に示されているように彼は新しいエルサレムの到来を、つまり黙示録のキリストを信じているのである。

ところがこれを「世界的発見」などと買いかぶり、ドストエフスキイの研究とはその作品の任意の箇所に触れて、それまで人が言わなかつたことをあたかも大発見であるかのように吹聴することであると考える人物が現われることになった。龜山郁夫がそうである。彼は『スタヴロギン神に成ろうとした男』(みすず書房)において、少女マトリヨーナが自ら望んでスタヴロギンに身を任せたとする、鬼面人を驚かすような解釈を提出した。何のことは無い、その際彼は少女にマゾヒズムを賦与すべく鍵となる動詞を意図的に誤訳しており(木下がいち早く指摘した)、また十二歳のそ

の子を十四歳と改ざんしているのである。

江川がマルクス『資本論』を読んではいなかつたのは疑いない。読んでいたならばその第一巻に「彼ら(諸商品)は心を一つにして、おのが力と権威を獸(貨幣)にあたえる。この印をもつもの、あるいは獸の名をもつものを除いては、買うことも売ることも誰にもできないようにした。その印は、その獸の名、またはその名の数字(666)である」が引用されていることに気づかなかつたはずはないからだ。マルクスは聖書学者バウアードの研究に触発されながら、666を皇帝ネロの名を刻印したローマの貨幣と読んだのであり、ヨハネ黙示録のこの文言に貨幣の発生の秘密が語られているのを発見。それゆえにこれを掲げたのだった。これは、ネロの名が黙示されていることによって書かれた年が特定できたこの書は、血の弾圧によって絶望的な状態にあつた帝国内の信徒を励まし、最後の勝利を預言すべく執筆されたものである。原始キリスト教の精神をよく保持するこの書をマルクスは高く評価していたのだつた。

対するに諸福音書は、マルクスの没後「亡友との同意のもとに執筆」したエンゲルスによれば、すべて黙示録の後、妥協と和解が成立し、キリスト教がローマの国教になつた時期に製作されたものである。そこでキリストは慈愛と奇蹟の人であり、血の復讐の大魔王である黙示録のキリストとはまったく異質である。東方教会はこの収録に反対し、

この流れをくむロシア正教の新証聖書では、黙示録は多くの場合削除されていた。ラスコリニコフがあまり信じていなかつた福音書をソーニャ・マルメラードヴァアは全面的に信じていた。

キリスト教がそこから発生したユダヤ教は「われを信せよ、われ以外を信するな」の唯一絶対神を特徴とし、これは古代近東で隔地間貿易に従事していたユダヤ人における、やがて貨幣に発展する利潤的觀念の発生と不可分の関係にあつた。これを受け継いだキリスト教もまた唯一絶対神の宗教である。マルクス主義はこのキリスト教の超克を目指して形成されている。

貧しく虐げられた都市の小市民への同情から作家活動を始めながら、ドストエフスキイの初期作品にはキリスト教への関心は稀薄だった。それがペトラシューフスキイ会、逮捕と死刑を免れてのシベリア流刑を経て、己の文学が右の壁(帝政)を前にしての小市民の意識と意志の分裂と相克にあると自認した作品(『地下からの手記』)の創造に到達した。そして『罪と罰』に至つてキリスト教は全面的に問題にされることになった。帝政下の小市民の出口を探求しようとするとき、キリストに祈つておればよいのか、それでは駄目なのかを問題にせざるをえなかつたのだ。

黙示録は千年の後に新しいエルサレムを預言していた。この書には旧約に先駆形としてダニエル書がありそこでも

救済は約束されていた。しかしそれは不渡りに終わつていたのであって、バトモスのヨハネはその儀を踏まぬためにサイト(期限)を一気に千年に延長した。中世とはそれを待つ期間だつといえよう。しかし時期がきてもキリストの再臨はなかつた。すなわち唯一絶対神の神話は終焉した。だいたいその頃からギリシャ古典に学び、人間を中心据えて考えるルネッサンスが興つた。デカルトはそれを「われ思う、ゆえにわれ在り」に要約した。その到達点が「自由、平等、博愛」のフランス革命だつといえよう。

この革命はナポレオン軍として、ルネッサンスも宗教改革も知らない遅れた農奴制帝政国家ロシアに押し寄せた。両首都の一つモスクワを占領されながら押し返してパリにまで至る。このロシア軍の貴族の将校たちの間から共和制への信奉者が現われ、デカブリストの運動に発展したのだから歴史は皮肉である。

以来ロシアの進歩派はナポレオンが勝利しなかつたことを残念に思つていた。その場合には帝政は打倒され、ロシアに共和制が実現していたからである。ラスコリニコフは「俺はナポレオンか凱か?」と自問したが、それは「帝政を打倒できる者か、それともそれに踏みつけられる者か」ということだつた。それに対し、神に代わつて人間が世直しをしようとするのは僭越であり、それは神に委ねておけばよいと考えたのが街娼ソーニャ・マルメラードヴァアで

ある。生来の楽天家であり、スピドリガイロフが自殺するに際して、持ち金を彼女に贈与したので、自身と弟妹を救いえたにもかかわらず、神が救ってくれたと信ずる。ラスコトリニコフにはそれが見えるのでシベリアに送られても厭然としなかった。

初期作品群において見られなかつたキリスト教が『罪と罰』以降において前面に押し出されてくることになつたのは、それがテカブリスト以来のロシアの変革の問題と係わりがあつたからである。

西欧ではたゞ形式的にせよ俗権と教会が分離していたのに対し、帝政とロシア正教会の上層は一体であり、帝政は神の命により支配すると宣伝教化している以上、キリスト教への信仰は帝政への加担となつた。ドストの「神を信する人」は政治的には保守派であり、国と社会の変革を人間が目指すのは僭越というものであつて、それは神意に委ねておけばよいと考えている。ソーニャ、ムイシキン、ゾシマらはこの系列の人々である。

対するに「神を信じない人」がおり、初期作品で明白なのは『家主の妻』の犯罪者ムーリンであり、『死の家の記録』の殺人者＝流刑者である。もつともこれらは思想や理論を持ち合わせてはおらず、それを有する最初の人となつたのは『虐げられた人々』のワルコトフスキだつた。スピドリガイロフはこの系譜に立つが、自死の直前にその精

神に異界との接触が生じ、仏心が生じてソーニャを救済する行動を敢えてした。ドストの人物たちは死を目前にするとき心をきたす。小説技法の一つとみなされるべきであり、ステパン・ヴェルホヴェンスキもまたそうだった。

ドストが生きた時代ロシアにはプロレタリアートは存在せず（ピョートル・ヴェルホヴェンスキの言葉）、存在していたのは革命一揆者たちであり、彼らは「神を信じない人」たちだつた。『悪靈』の全員がそうである。ただしその精神を思想的に語つたのはキリロフだつた。「神が無い以上おのれの我意が神だ」がそれである。ペレヴェルゼフはこの「我意」の言葉をもつてこの派の人物たちを締め括つた。対するにソーニャらは、短編『温順（おとなしい）な女』から採用して「温順な人」と括した。

しかしながらその作品群の中心に立つのは、互いに和解妥協はけしてしないこれら「温順」と「我意」の双方を内に孕み、その間にあつて逡巡する人物、ペレヴェルゼフが第二作の表題『ドヴォイニク（二重人、分身）』から探つて「二重人（格）」と命名した人物である。主人公たちは多くはこのタイプであり、それ以外では『白痴』一編があるのみである。

二重人ドヴォイニクは、社会的身分でいえば上層と下層のあいだにある小市民の精神と性格であり、『貧しき人々』のジェーヴシキンが最初の人である。彼は貧しく、出自の

よきに上り出世する者たちを羨みながら、ワルワーラとの文通に懇めを見出していた。しかし彼女が嫁して去り、文通は終焉し、一編は彼が狂乱状態になつて終わる。

第二作のゴリヤートキンは文通の無効を知つてゐるから、露骨に出世を目指す。彼にも逡巡の時期はあつたはずなのだが、今やそれはかなぐり捨てられている。彼は長官の令嬢の女婿になって出世しようと考え、招かれもせずに誕生日の夜会に闖入してつまみ出される。その帰路に怪しげな者が現われて家まで付いて来、見るとそれが自分とそっくりな人物、つまり分身ドヴォイニクであった。ゴリヤートキンが元来二重人であり、その矛盾が激烈になつて温順と我意に分裂し、温順な片方に、我意の片方が幻視されたのである。

ドストの文学を対話のそれと見なすのは正しいが、十全ではない。なぜならば対話を中軸に据えた文学形式には戯曲があり、しかしドストエフスキが戯曲を目指した形跡は皆無だからである。ただし彼は前代未聞の対話を描いた。それは二重人が自己分裂し、温順な一方に我意の他方——すなわち分身——が幻視されるとき、その双方によつて交わされる対話である。それは戯曲で描くのは不可能で、ただ小説において、作中に語り手の作家を登場せしめ、その「私」が分身の出現後はそれに変身するという手法によつて描きえたのである。その最初の試みは第二作だつたが、

それはドスト自身が認めるように、失敗した。私たちがその成功した完成形を見るためには『カラマーゾフの兄弟』のイワンの悪魔との対話を待たねばならないのである。

十九世紀ロシアの知識人はフランス革命に強く震撼せしめられており、地主貴族階級でも、文学者になつたほどの鋭敏な精神は己がぞくする階級の没落が避けがたいことは知つていた。したがつてその文学は憂鬱の深化を特徴とすることになつた。二重人は小市民の精神であり、その主人公たちはラスコトリニコフがそうだつたように革命を望みまた望んでいなかつた。社会の変革を目指す者たちは犯罪者に堕し、すべてを神意に委ねた人は宗教忍従に凝固した。こうした小市民を描くことから始まつた、作家は或る時期から地主貴族をも描くことになつた。しかし彼がすでに獲得していた文体は貴族を描くのに相応しいものではなかつた。彼が描き創造したのは、精神は小市民で衣装は貴族というペレヴェルゼフが言うところの仮装人物なのである。その最大の人物のひとりはムイシキンである。

ドストエフスキの人物たちはすべてその原型をコトコリに持つてゐる。二重人のそれはボアリシキン、温順な人はアカリキ・バシマーチキンといったごとくである。ムイシキンのそれはだれであろうか。それは『検察官』のフレスタコトフである。同じペテルブルグであつても『罪と罰』の下層とは異なつて『白痴』が対象としたのは作家

にとつては、得てではなかつた貴族社会である。このため彼は貴族の血筋ではあっても外国の施設にあつた精神病者の性的不能者をその社会の通過者として設定したのである。そうした例外的人物への反応を通じてその社会をあぶりだす手法であつた。

ゴーリーにおいてフレスタコトフがチコフに深化发展したように、ムイシキンはスタヴローギンに変貌する。またこれに応じて『白痴』の語り手「私」は作中作家アントン・ゲーにとつて代わる。この時期ドストエフスキイは多年にわたる聖書研究の結果、キリストの神聖が悪魔によつて支えられていることに気づき、「フランス思想は悪魔を欠いているために浅薄なのです」と言うに至つていた。ムイシキンは「美は世界を救う」と語つたとされており、これはこの人物が微弱ではあるが作家的志向を有していたことを物語る。「編は温順な人は文学者とは成りえないことを示して終わつてゐる。これはより強くスタヴローギンに受け継がれてゐる。これは作中作家アントンの否定的分身であり、悪魔の觀点から小説が書けぬものかと考えてゐる。『告白』を彼の創作とみなすことは出きるのだ。しかし小説はルカ伝の奇蹟を信じてゐるアントンによつて書かれなければならなかつた。ここにこの作品の眞の主題がある。

その失敗に憲りて第一作以降ドストエフスキイはドヴォイニーコクの使用を控えてきた。しかしジラトルが正鶴に言

ある。それは当人にとっても幻影であるものを、読者には鮮明に見せねばならないといつて一律相反する課題だった。「三章まではうまく書いていた」作品がその後に振れが曲がつてしまつたのは、分身すなわち第一のゴリヤートキンの出現後の両者の確執を長々と書いたがためだった。それは濃密にしかし短く書かれるべきだったのである。

長大なこの小説の山場はしたがつて「イワンの惡夢。惡魔」の章である。「私」は第一作でそうであつたように、今や半身と正確に命名されることになつたドヴォイニーコクは分身に変身し、イワンを発狂に追い込むと元の「私」に戻り、何食わぬ顔をして語り続ける。忘れてはならないのは『兄弟』は虚構の物語だということである。当然のことながら冒頭では「私」と人物たちは或る距離で隔てられてゐる。しかしそれは徐々に縮められてゆき、最後の裁判の場面ではゼロに近づいてゐる。すなわち「私」は法廷の中に在つて至近距離でおのが人物たちを記してゐるのだ。そしてこの「私」は法廷の場が終わると溶解するように消滅している。小説はまだまだ続いているが、その時間は十三年前などではなく、現在にせり上がり、永遠の現在が出現している。「私」はすでに使い捨てられ、ドストその人が書いている頁とみなされる。

小説は生き物であり、長大な小説においては当初の目論見とは違つたことが生じうる。作家はおのれの死後も存在

するよう、「二重性が追求されていないものは一作も無い。そして二十四年の星程の後今や作家は『未成年』の結末に近い章において、この語を十五回にわたつて集中的に使用し、その意味を定義しさえする。語り手の「未成年」の口を通じて、自分がドヴォイニーコクを描くことを作家的使命としてきたことを告白する。父ヴェルシーロフがその大きな教養にもかかわらずおのが二重性を克服できず、何ものも創造できなかつたのに対し、息子は農奴の血に支えられて二重性を克服し『未成年』を創造した。

ドストエフスキイはペレヴェルゼフの言葉でいうと二重人=芸術家であり、作中の語り手はすべて虚構化されている。私が「作中作家」と呼ぶほうが適切とみなす所以である。『貧しき人々』直後の兄への手紙に記されているように、素顔を隠すのは彼の作家的矜持であり、それはすべての作品に貫かれている。したがつてこの存在は三人称の場合はもちろんのこと、たんに「私」を名乗つてゐる場合にも作中人物の一人として扱われなければならない。『カラマゾーフの兄弟』はその発展であり完成なのである。したがつて序文の「私」をドストと完全に同一の人物と見てはならない。また十三年後の現在を物語る続編があると語る言葉は箱庭とみなされる。彼にはそれを書き切れねば死ねず、しかし書き切れれば死んでよい課題があつた。二重人の二極分裂が極点に達したときに幻視される分身の描出で

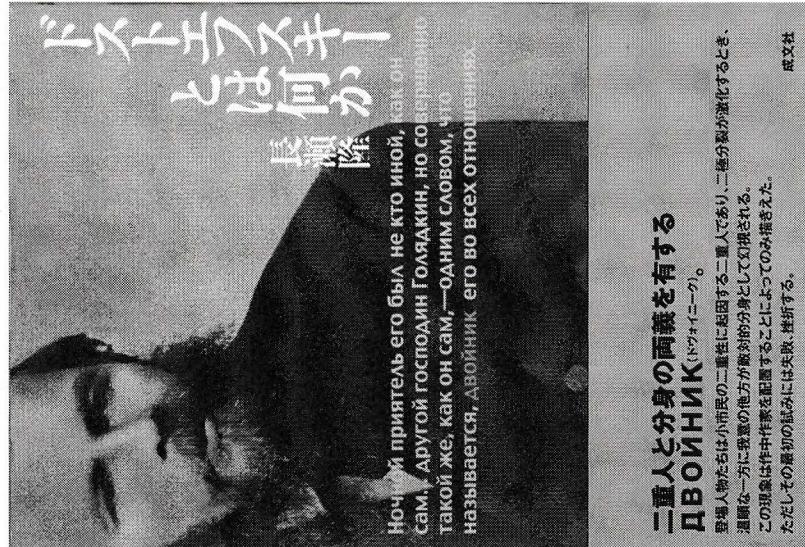
し続けるロシアの未来を考えた。かくて少年たち、わけてもリードーのクラソトキンが重要な場所を占めることになつた。「キリストは現代に生きていたならば革命家に成つた」とする少年の言葉は、かつて自分がそれを朗讀し、死罪まで受けることになつたベリンスキイの「ゴーリーへの手紙」にあつた思い出の言葉である。

少年はしかしイワンの一の舞を案じたアリヨーチヤから「君は不幸になります」と折伏される。結局彼は「カラマゾフ万歳」の音頭をとつてアリヨーチヤを未来に向かつて送り出す。これはドストエフスキイがアリヨーチヤヒクラソトキンの提携にロシアの未来を託したためである。そしてそれは黙示録と福音書間に存在する矛盾の解決ということでもあつた。それはユダヤ=キリスト教の唯一絶対神の伝統に生きる者が避けることが出来なかつた課題であり、ドストエフスキイはそれをここまで、つまりは極限まで追及したのである。単数になつてゐる以上、これには兄たちは含まれず、それはアレクセイ一人を指している。しかし作家がはつきりとその名を掲げなかつたのはなぜか？

すでに第一編兄イワンに「ここで物語るわけにはゆかない。それは他の物語の、別の長編小説の構想となるべき話であるが、それにいつの日に着手するかどうかを私は知らないのである」と述べてゐる。十三年後の続編を念頭に置いている人の言葉ではない。検事の論告を五ヵ月後死ぬ

ことになる人物の「白鳥の歌」と形容した作家は、書きつつある作品を自身白鳥の歌と意識していたと思われる。当の作家は検事よりも早く一ヶ月後に亡くなつていることを思え。作家はこれが最後の小説の結びであること、すなわちこれが絶筆となると思っていた。したがつてこのカラマゾフは自身を指すと読まれなければほらない。すなわち

「よくぞここまでよくやつた、ドストエフスキイ万歳」と自讃しつつ、『貧しき人々』以来の全読者と別れを告げたのである。(ペレヴェルゼフ『ドストエフスキイの創造』みずす書房一九八九年、『ドストエフスキイとは何か』成文社二〇〇八年)



近藤靖宏

長瀬隆『ドストエフスキイとは何か』(一〇〇八、成文社)

——黙示録を架け橋としたマルクスとドストエフスキイの関係について——

私はドストエフスキイの会が年一回発行する『ドストエフスキイの広場』(以下『広場』と略す)の本年四月刊の18号に長瀬氏の著書の紹介文を執筆させていただきました。私はそこで長瀬氏の主張に沿ってドストエフスキイが一貫して追求した創作方法について述べさせていただきました。それはドストエフスキイの作品に登場する「二重人」およびその二重性が極限に達したときに出現する「分身」を描くことによって有効な手法でした。

しかし長瀬氏は本書で少なからずマルクスについて言及しつつドストエフスキイが「二重人」(ロシア語ではドヴォイニコフ)と「分身」をその作品の題材に取り入れるに至った社会的・思想的背景についても述べています。にもかかわらず私は『広場』の読者の主な関心が作品の創作手法そのものにあると思われること、そしてマルクス主義への

アレルギーがある方もいるのではないかということを配慮していわば長瀬氏によるドストエフスキイの詩学とともにいうべき内容に特化して『広場』への原稿を執筆させていただき、その社会的・思想的背景まで踏み込まずに筆を置くことにしました。今回はこういった『広場』では十分に論じていられないことについて補足させていただこうにしました。

マルクスは、その思惟方法は哲学的であり、そうでありながら実践においては過剰にラディカルな指針を示す経済学者・革命指導者でした。マルクスは「宗教は阿片なり」という言葉が示すようにキリスト教そのものには批判的でありましたが、新訳聖書の最後を飾る「ヨハネ黙示録」(以下「黙示録」と略す)に着想を得て彼の学説は展開されていると長瀬氏は説いています。そして同じ黙示録に熱い関心を示していたドストエフスキイ。ここから生ずるマ